

分 科 会

第1分科会

学校・家庭・地域との連携

「学校・家庭・地域との連携・協働を推進する公民館の在り方」

- | | | |
|----------|---------------------------------|-------|
| ▶ 助言者: | 愛知教育大学 名誉教授 | 大村 恵 |
| ▶ 司会者: | 愛知県教育委員会西三河教育事務所 主査 | 廣瀬 浩司 |
| ▶ 発表者: | 愛知県長久手市くらし文化部文化創造課 事業係長 | 黒野 雅直 |
| | 愛知教育大学 准教授 | 中山 弘之 |
| | 愛知県新城市教育委員会生涯共育課 主事 | 佐野真由美 |
| ▶ 記録者: | 愛知県新城教育委員会生涯共育課 課長兼館長 | 河口 昌和 |
| | 愛知県新城教育委員会生涯共育課 副課長兼係長 | 生田 智之 |
| | 愛知県教育委員会東三河教育事務所
新城設楽支所 教育主事 | 松井 鮎子 |
| ▶ 運営責任者: | 愛知県豊明市教育委員会生涯学習課 課長 | 山田 隆貴 |
| ▶ 会場責任者: | 愛知県春日井市いきがい創生部東部市民センター 所長 | 中山 裕之 |

第2分科会

共生社会と公民館

「多様性を尊重し、相互理解を促すための公民館の役割」

- | | | |
|----------|-------------------------------------|-------|
| ▶ 助言者: | 東京都国立市教育委員会教育部 公民館館長 | 井口啓太郎 |
| ▶ 司会者: | 福井県美浜町耳公民館 館長 | 森本 哲 |
| ▶ 発表者: | 福井県大野市下庄公民館 館長 | 表 早苗 |
| | 福井県大野市下庄公民館 主事 | 山村 勇人 |
| | 愛知県知立市教育委員会生涯学習スポーツ課
課長補佐兼生涯学習係長 | 清水 愛子 |
| ▶ 記録者: | 愛知県碧南市教育委員会生涯学習課 主事 | 小嶋 悠資 |
| | 愛知県知立市教育委員会生涯学習スポーツ課 主事 | 小田 皓太 |
| | 愛知県教育委員会海部教育事務所 指導主事 | 松永 典子 |
| ▶ 運営責任者: | 愛知県刈谷市教育委員会生涯学習課 課長 | 山田 芳久 |
| ▶ 会場責任者: | 愛知県碧南市教育委員会生涯学習課 課長兼館長 | 金原 厚夫 |

第3分科会

地域防災と公民館

「防災・災害時において公民館ができることと今後の役割」

- | | | |
|----------|------------------------|-------|
| ▶ 助言者: | 名古屋大学 名誉教授 | 福和 伸夫 |
| ▶ 司会者: | 石川県野々市市中央公民館 館長 | 笠間 悟 |
| ▶ 発表者: | 石川県輪島市立大屋公民館 館長 | 久堂 寛久 |
| | 愛知県田原市童浦市民館 館長 | 岡本 長佳 |
| ▶ 記録者: | 愛知県蒲郡市形原公民館 館長 | 小林 正人 |
| | 愛知県豊橋市教育委員会生涯学習課 専任主査 | 中木 真一 |
| | 愛知県教育委員会尾張教育事務所 主査 | 長谷川裕城 |
| ▶ 運営責任者: | 愛知県豊川市教育委員会生涯学習課 課長兼館長 | 渡辺 寿彦 |
| ▶ 会場責任者: | 愛知県教育委員会東三河教育事務所 主査 | 中村 一哉 |

第4分科会

地域づくりと公民館

「地域住民による地域の活性化を実現するための公民館の在り方」

- | | | |
|----------|-------------------------|-------|
| ▶ 助言者: | 岐阜大学 副学長補佐・教授 | 益川 浩一 |
| ▶ 司会者: | 岐阜県下呂市教育委員会社会教育課 課長 | 中島 盛彦 |
| ▶ 発表者: | 岐阜県美濃市藍見公民館 館長 | 藤川 好康 |
| | 岐阜県美濃市藍見地域ふれあいセンター | 只 博美 |
| | 愛知県大府市立横根公民館 館長 | 北井 康弘 |
| | 愛知県大府市立長草公民館 館長 | 三ツ矢みか |
| ▶ 記録者: | 愛知県常滑市教育委員会生涯学習スポーツ課 主査 | 中村 彰良 |
| | 愛知県教育委員会知多教育事務所 教育主事 | 狐塚 大介 |
| | 愛知県教育委員会尾張教育事務所 教育主事 | 坪内 利樹 |
| ▶ 運営責任者: | 愛知県東海市教育委員会社会教育課 課長 | 永井 伸明 |
| ▶ 会場責任者: | 愛知県東浦町ふくし文化部学び支援課 課長 | 筒香 広昭 |

第5分科会

公民館等の管理・運営

「これからの時代や現状を見据えた公民館等の管理・運営の在り方」

- | | | |
|----------|------------------------------|-------|
| ▶ 助言者: | 名古屋工業大学大学院 教授 | 上原 直人 |
| ▶ 司会者: | 富山県南砺市教育委員会生涯学習・文化振興課 副主幹 | 坂本 秀忠 |
| ▶ 発表者: | 富山県南砺市福野北部地域づくり協議会 | |
| | 生涯学習リーダー | 藤井 健 |
| | 愛知県岩倉市生涯学習センター | |
| | 指定管理者特定非営利活動法人 来未 iwakura 課長 | 木下 佳美 |
| ▶ 記録者: | 愛知県蟹江町教育委員会生涯学習課 課長兼館長 | 佐々木淑江 |
| | 愛知県飛島村教育委員会生涯共育課 主事 | 石井 一成 |
| | 愛知県岩倉市教育委員会生涯学習課 課長 | 中野 高歳 |
| ▶ 運営責任者: | 愛知県犬山市教育委員会文化推進課 | |
| | 課長補佐兼南部公民館長 | 中島 邦彦 |
| ▶ 会場責任者: | 愛知県稲沢市教育委員会生涯学習課 課長兼館長 | 別府 正弘 |

第1分科会

学校・家庭・地域との連携

「学校・家庭・地域との連携・協働を推進する公民館の在り方」

発表テーマ	劇場における社会教育の可能性
発表者	愛知県長久手市くらし文化部文化創造課 事業係長 黒野 雅直 愛知教育大学 准教授 中山 弘之

1 はじめに

公民館は社会教育を担う場所であるが、その場所だけしかその役割を担えないわけではない。もしかすると、地域の中には、社会教育を担う上で、多くの可能性を秘めている場所があるのではないだろうか。そこで、長久手市にある「文化の家」にある、劇場・公共ホールを活用することで、社会教育を担う場所としてどのような可能性があるかを、事例を紹介しながら考察していくことにした。

2 取組に至る経過

長久手市は令和4年の組織再編により、劇場である「文化の家課」と「生涯学習課」が合併した。そのため、劇場の企画制作職員が社会教育事業にも関わることになった。このことをきっかけに、それまで劇場側が意識していなかった、社会教育的運営・事業展開が、学校へのアウトリーチや、地域を巻き込む事業の中で実践されていたことに気づかされることとなった。

そこで、愛知教育大学准教授であり、長久手市社会教育委員 長久手市生涯学習プラン策定委員でもあった中山弘之氏に御指導・御助言をいただきながら、取組を進めることにした。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

劇場が実施する学校アウトリーチ事業や市民参加事業の中で、芸術分野で社会教育的な側面を持たせながら内容を企画した。具体的には、芸術家という人間自身に焦点を宛て、芸術家と子供たちや地域の人たちと関わり合いやコミュニケーションを発生させることで、多様な価値観や生き方に触れる機会を創出した。

4 今後の課題

社会教育的な側面を意識しながら劇場の事業を制作することは、入念な目的確認や出演者との打ち合わせなど、通常事業よりも多くの時間を必要とする。このため、自治体側の人員の確保、社会教育分野を軽んじない姿勢が求められる。しかし、どこも人員が圧倒的に足りないのが実情である。また、実施する側に社会教育の専門性と劇場専門職の両面が必要とされることから、自治体職員が異動の中で担当する業務としては負担が大きいことが課題となった。

また、社会教育主事などの専門職が長期的ビジョンをもって事業を企画していく必要があるが、実状としては難しいと言わざるを得ない。

第1分科会

学校・家庭・地域との連携

「学校・家庭・地域との連携・協働を推進する公民館の在り方」

発表テーマ	西部公民館を活用した子供の居場所づくり		
発表者	新城市教育委員会生涯共育課 主事	佐野 真由美	

1 はじめに

(1) 新城市の概要と地域課題

平成17年の3市町村合併により、愛知県内第2位の広大な面積（499.23 km²）を有する自然と歴史が豊かな地域である。人口減少と急速な少子高齢化（高齢化率 38.9%）が進行しており、地域における人と人とのつながりや活気の低下が課題となっている。

(2) 千郷地区と西部公民館の特性

対象の千郷地区は千郷小（499名）・千郷中（291名）を擁し、市内でも児童生徒数の多い地域である。その学区にある西部公民館は、千郷中の体育館・武道場と一体化された複合施設「ちさと館」の一部であり、学校と地域を結ぶ拠点として最適な環境にある。

2 取組に至る経過

中学生が、特別な行事以外で公民館を利用することはほとんどなかった。そのため、テスト勉強のためにわざわざ地域外の図書館へ移動する生徒が多く見られた。しかし、下校時に公民館前の駐車場近くで、親の送迎を長時間待つ生徒の姿があった。

また、地域住民から「公民館を中学生に利用させたい」「中学生とつながる機会がほしい」との声が上がり、社会教育審議会の検討を経て、居場所づくりの整備が始まった。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 日常的な立ち寄り環境の整備と周知

無料スペースの開放方針について、生徒議会を通じて各学級に周知し、保護者の送迎待ちの際に気兼ねなく立ち寄れる場とした。また、夏季のクーリングシェルター指定などの機会を生かして、年間をとおして安心して過ごせる場所づくりに努めた。

(2) 学習場所の提供と地域人材による学習サポート

テスト期間を中心に空き教室を無料・予約不要で開放し、生徒同士が教え合いながら自主学習に取り組める場を提供した。また、大学生や教員OB等のサポートスタッフを配置し、分からないところを気軽に質問できる期間を設定した。

(3) 「幅広い学び」と「多世代・家庭とのつながり」の創出

産学官連携のVR体験やプログラミング講座、ちさと郷土研究会と連携したデジタル紙芝居の披露等を実践した。また、地域イベント等の機会を活かし、館内に家庭教育に役立つ情報コーナーを設けて、保護者への情報発信を行った。

4 今後の課題

(1) 中学生のニーズに応える講座企画力と参加動機の創出

中学生の興味関心や必要性に寄り添い、「参加したい」「必要だ」と実感できる魅力あるテーマ設定やアプローチ方法を工夫していく。

(2) 一過性で終わらない継続的な異世代交流の実現

地域住民や団体の「子供と関わりたい」「地域を元気にしたい」という思いを実現するためにも、単発イベントで終わらせず継続的な交流へとつなげていく。

発表テーマ	世代をつなぐ地域の力～青年団体が生み出す交流～		
発表者	福井県大野市下庄公民館 館長	表 早苗	
	福井県大野市下庄公民館 主事	山村 勇人	

1 はじめに

(1) 大野市下庄地区の概要

直径約 10 kmの大野盆地の北西部に位置し、人口約 7,500 人、32 区で構成される大野市の中で 2 番目に大きい地区である。また、中部縦貫自動車道の大野 IC が当地区にあることから、商業施設も複数進出してきており、農村集落と住宅地が混在する住みよい地域となっている。

(2) しもプロ(下庄を楽しむプロジェクト)について

当地区を中心に活動する会員 23 名の青年団体で、今年で結成 13 年目を迎える。地域資源を活かす活動に取り組んでおり、令和元年には、「川に親しみ地域で守る」活動により、河川愛護功労者表彰、令和 6 年には、社会教育の充実発展に尽力した功績から大野市社会教育功労者表彰を受けた。また、同年に、ふくい SDGs パートナー及びおおの SDGs パートナーに登録し、次世代につなぐ社会づくりの実現に向け、活動の幅を広げている。

2 取組に至る経過

当地区の若者に、少しでもまちづくりに参加するきっかけにしてみたいという思いから、公民館で募集を開始し、有志 6 名が集まり結成された。「自分たちが楽しみながら下庄を盛り上げる」をモットーに、「自分たちのやりたいを叶える」機会の提供に貢献している。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 木瓜川ダックレース

大野の豊かな水に親しみをもち、地域の自然に興味を持ってもらうという主旨でイベントを企画し、毎年約 200 名が参加する恒例行事となっている。開催 1 週間前には、地区の中高生や下庄をよくする会のメンバーで、木瓜川的环境美化活動にも取り組んでいる。

(2) 親子農業体験

「下庄みんなで楽しく食育」と題して、さつまいもの苗植えから収穫、販売までの体験を毎年実施している。販売での売上は全て参加者に還元されることから、各自で販売用チラシを作ったり、値段決めをしてもらったりし、楽しみながら農業を学ぶ機会を提供している。

(3) シャボン玉ワークショップ

大野市と関西大学の連携事業で、学生と住民の協働による、まちづくりに取り組む団体「横町編集部」と共催で、リノベーションしたふとん店を拠点に、子供から大人まで楽しめるシャボン玉ワークショップを実施している。体より大きいものや無数のシャボン玉を一気に作る体験が、親子連れに大変好評である。また、会場として地区の神社や広場を利用するなど地域の身近な場所を活用し、新たな交流の場づくりにつなげている。

4 今後の課題

しもプロに限らず団体共通の課題として、新規加入が難しく、参加者も固定化されつつあるため、実働メンバーが年々減少している。自分がやりたいことを実現できることの楽しさを実感してもらえるよう、世代交代や人手不足解消に向け、幅広い世代の方々が気軽に参加できる行事・活動を継続して企画し、目にする機会を増やし、興味をもってもらえるようにする。

第2分科会

共生社会と公民館

「多様性を尊重し、相互理解を促すための公民館の役割」

発表テーマ	公民館から広がる「多文化共生のまち」を目指して
発表者	愛知県知立市教育委員会生涯学習スポーツ課 課長補佐兼生涯学習係長 清水 愛子

1 はじめに

知立市はこんなまち！ 知立市の特徴を5つのポイントにまとめて紹介すると以下のようなになる。

- ① 周辺都市のベッドタウン
- ② 交通の要衝
- ③ 開発が進む知立駅周辺エリア
- ④ 歴史と文化のまち
- ⑤ 多様な人々が暮らすまち

2 取組に至る経過

- (1) 知立市は、総人口に占める外国人の割合が約8%で、愛知県内でも上位に入る外国人集住率となっている。令和3年度には「多文化共生の未来都市知立を目指して～日本人・外国人誰一人取り残さない持続可能なまちづくり～」という提案により、内閣府からSDGs未来都市に選定された。長期的に住む外国人市民も増加しており、市全体として多文化共生社会の推進が重要になっている。
- (2) 公民館が、国籍・文化を問わず地域の方が生涯学習や社会教育の場として活用できる施設であることを外国人市民の方にも知ってもらえるよう広く周知し、公民館の特色を生かして地域住民と外国人市民が交流する場となるような取組を推進していく必要がある。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

- (1) 関係団体などが主体の取組
 - ① ゆかたパーティー
 - ② CHIRYU にほんご教室
- (2) 公民館が主体の取り組み
 - ① ポルトガル語講座、1 DAY 講座「ペルー料理を作って食べよう！」
 - ② 外国人向けの公民館の使い方動画の作成

4 今後の課題

- (1) 言語や文化の異なる外国人市民に対して、公民館という施設の位置付けや使用上のルールをどのように理解してもらうか。
- (2) 公民館を拠点とした地域住民と外国人市民との交流を、継続的かつ市域全体にどのように発展させていくか。

発表テーマ	災害時の避難所運営と今後の課題について	
発表者	石川県輪島市立大屋公民館 館長	久堂 寛久

1 はじめに

(1) 輪島市の概況

輪島市は能登半島の北西部に位置し、奥能登の中核となる市である。面積は約 426 km²で、11,495 世帯、23,575 人(R5.4.1 時点)が生活する。輪島塗、朝市が全国的に有名である。

(2) 大屋地区の概要

大屋地区は輪島市の中央部に位置し、海沿いから山間部にかけて南北に細長く伸びている。面積は 50 km²の 21 町会で構成され、市の人口の約 20%が暮らしている。産業も多岐に渡る。

2 取組に至る経過

(1) 令和 6 年 1 月 1 日 16 : 10 能登半島地震の発災

M7.6 最大震度 7 死者 181 名、行方不明者 2 名、10,542 棟に及ぶ家屋が被害を受けた。

(2) 大屋公民館周辺の発災直後の状況

幹線道路は至る所で寸断し、孤立した集落では集落ごとにヘリコプターで救出され、そのまま加賀地方での避難を余儀なくされた。大屋公民館の建物には、ほとんど被害がなかったため、避難者が次々と集まり、思い思いの場所で毛布などにくるまっていた。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 避難所開設当初の混乱期での取組

廊下や玄関口まで避難者で溢れかえり、夜に人数を確認すると避難者数は 151 人、名簿記載の避難者数は 331 人だった。避難者が多いことで入館を諦め、車中泊を選んだ人や出入りが頻繁にあったため、入館者の把握が追いつかず、安否確認等の十分な対応ができなかった。

(2) 対応に追われた避難所運営

開設早々(1/6)に、感染症（ノロウイルス）が発生。全館の消毒・清掃等、その対応に追われた。また、他の避難所ではコロナが発生したとの情報も入り、水際対策にも神経を使われた。咳をしていても平熱ならば、市販薬で対応したが、常備していた薬はすぐに底をついた。

(3) 避難所運営で最も留意した点

長期避難生活は心的負担が大きいので、ダンボールベッドでプライベート空間を確保するとともに、館内清掃や換気を欠かさず行う等、体調管理に力を注いだ。4月に洗濯機、5月中旬にはシャワーが設置され、やっと人心地がついたと喜ばれた。

(4) 避難所運営で大変だった点

避難所閉鎖を目前に控えた令和 6 年 9 月 21 日朝、奥能登豪雨が発生した。土砂の中から救出された人々が公民館に運び込まれ、閉鎖は延期。避難所運営は長期化することとなった。

4 今後の課題

(1) 災害備蓄品は最低でも地区人数分が必要であるが、スペースの確保等の問題がある。

(2) 災害発生時、断たれたインフラの応急復旧や代替施設の早期設置など、効率的な初動態勢を築くことが求められる。住民の意識向上のための定期的な初動訓練が必要である。

(3) 担い手不足が深刻なため、いかに流出を防ぎ、働き手を引き留めるかが課題である。

第3分科会

地域防災と公民館

「防災・災害時において公民館ができることと今後の役割」

発表テーマ	～地域防災と公民館～ 市民館の防災の取組	
発表者	愛知県田原市童浦市民館 館長	岡本 長佳

1 はじめに

愛知県渥美半島の北東部にある童浦校区は、令和8年4月現在で3,377世帯、6,944人が暮らす地域である。当地域は豊かな自然に恵まれる一方、臨海部にはトヨタ自動車田原工場をはじめとする多数の企業や再生可能エネルギー施設が集積する工業地帯でもり、広域からの就業者も多い。そのため、大規模災害発生時には、多大な混乱が予想される。

2 取組に至る経過

童浦校区コミュニティ協議会が校区内12の自治会を取りまとめる中で、災害時の被害集計や避難所運営における混乱回避が長年の課題であった。特に大規模災害時には、渥美半島が「陸の孤島」となる恐れがあり、外部の支援を待つ間の「自助」および「共助」の体制構築が急務であった。トヨタ自動車によるドローン情報提供訓練等で企業連携が進む一方、住民の防災意識の底上げや実践的な避難所運営のノウハウ、高齢者、外国人、ペット同伴者等の避難者への対応力向上が求められ、市民館を拠点とした体系的な防災事業を展開するのに至った。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

- (1) イベント・行事での防災啓発 「市民館まつり」での防災フェア、夏まつりでの「消防団員加入促進アンケート」、地域のまつりでの小学生を対象とした起震車による地震体験などを通し、幅広い世代への啓発に努めた。
- (2) 避難所開設・運営訓練 総合防災訓練において、童浦小学校体育館を会場に実施した。負傷者や外国人、帰宅困難者など総勢157名の多様な避難者を想定した。事前配布の「避難所利用者登録票」により、受付の混乱を回避したほか、エリア区画割りやテント設営、日赤による防災指導を実践した。
- (3) 地域から学ぶ防災の取組（防災教室）を、地元の小学4年生65名を対象に開催した。防災倉庫の見学や耐震性貯水槽を用いた汲み上げ体験、消火器体験や過去の災害学習等を通し、子供たちが防災を自分事として捉える力を養った。
- (4) 11月の田原市一斉防災訓練では、各地区の自主防災会が避難・救護・炊き出し訓練等を実施した。住民が小班ごとに指定避難所である童浦市民館を目指す中で、隣保班長から校区会長へと情報を伝達する際に、避難者数を確実かつ迅速に報告できるか検証を行った。

4 今後の課題

本事業で「自助・共助」への理解は進んだが、以下の課題が浮き彫りとなった。

- (1) 避難所レイアウトの重要性から、「事前のマニュアル策定」や夜間発災を想定した「夜間訓練」の実施等、より現実に即した備えへとなるようアップデートが求められている。
- (2) ダンボールベッド等の設営資材を迅速に扱うための定期的な訓練が必要である。また、受付時の登録票記入で戸惑う場面があったため、スムーズに確認できる工夫が必要である。
- (3) 外国人住民への、言葉や文化の壁を越えた防災サポート体制の強化が必要である。また、依然として災害に対する関心の薄い層があるため、そこに対するアプローチ等、住民一人一人が主体的に防災力を向上させることができるよう働きかける必要がある。

第4分科会

地域づくりと公民館

「地域住民による地域の活性化を実現するための公民館の在り方」

発表テーマ	公民館は地域の接着剤		
発表者	岐阜県美濃市藍見公民館 館長	藤川 好康	
	岐阜県美濃市藍見地域ふれあいセンター	只 博美	

1 はじめに

(1) 地域の接着剤としての公民館

- ① 「つどい・まなび・むすびつく」を基本とした、地域に根ざした公民館活動を推進している。
- ② 少子高齢化や地域コミュニティの希薄化を背景とした、「地域の接着剤」としての役割を重視している。

(2) 取組の視点

- ① 「地育力」「共創力」「発信力」を柱とした地域づくりを推進する。
- ② 地域のつながりの再構築を目指した公民館運営を行う。

2 取組に至る経過

- (1) 地域行事の担い手不足や自治会等との連携不足、公民館情報の周知不足という課題が顕在化していた。
- (2) 地域のつながりの弱体化を共通課題と捉え、公民館によるコーディネート機能を強化する必要性があった。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 地育力を高める取組

- ① 中学生ボランティアによる夏祭りの実施や区民運動会、公民館まつりを実施する際に、企画・運営段階から参画をしてもらう。
- ② 地域への愛着と主体性を醸成するとともに、世代間の交流を促進する。

(2) 共創力を高める取組

- ① 自治会活動への支援及び防災教室等において、多様な団体と連携するようにした。
- ② 地域団体の活性化と地域課題解決に向けて、協働体制を構築した。

(3) 発信力を高める取組

- ① AI イラストを活用した公民館だよりに刷新した。
- ② LINE 公式アカウント及び Instagram を活用しながら、ハイブリッド型の情報発信を行った。

4 今後の課題

- (1) 中学生ボランティアの継続的な参加を促すことと地域定着につながる仕組みを構築すること。
- (2) 地域団体との連携強化と情報発信の充実による「地域の接着剤」としての機能を向上させること。

第4分科会

地域づくりと公民館

「地域住民による地域の活性化を実現するための公民館の在り方」

発表テーマ	外国人の力を活用した地域づくり		
発表者	愛知県大府市立横根公民館 館長	北井 康弘	
	愛知県大府市立長草公民館 館長	三ツ矢みか	

1 はじめに

大府市は、1970年9月1日に愛知県内で24番目の市として市制を施行した。名古屋・知多・三河を結ぶ交通の要衝に位置し、JR東海道本線で名古屋駅から約15分という利便性に加え、高速道路網の整備により、優れた交通アクセスを誇る。また、豊かな自然環境、産業、住環境が調和した、暮らしやすいまちとして発展を続けている。

大府市は、健康づくりやスポーツ振興に積極的に取り組み、「健康都市」を掲げたまちづくりを推進するとともに、「音楽のまち おおぶ」や「バイオリンの里」の実現にも力を入れている。また、果樹栽培も盛んで、「大府のぶどう」は地域の特産品として親しまれている。

2 取組に至る経過

小学校区に1館ある公民館9館において、各館で年間約40件の講座や行事とともに、サロンやマルシェなどを企画・運営し、地域づくりに取り組んでいる。しかし、公民館利用者の固定化や地域活動の担い手の高齢化が進む現在において、従来の地域活動や行事の維持が難しくなりつつある。そのような中、従来の枠組みを見直し、新たな活力の開拓が必要となっている。

そこで、新たな地域づくりの担い手として、地域に住む外国籍住民との協働に注目した。現在、地域に住む外国籍住民の公民館利用や地域活動への参加は少ないため、地域の一員としてスムーズに参画できるよう促すとともに、外国籍住民がもつスキルや活力を地域活動につなげ、多様な住民が共生できる新しい地域づくりを目指すことにした。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 外国籍住民が講師となる講座の開催

英会話カフェでは、大府市在住のフィリピン人大学生が、日本人の中学生や高校生を対象に、英語のみで自己紹介やゲームを行った。このような英語での交流を通して、参加者の外国籍住民に対する見方に変化が見られた。

(2) 地域施設紹介

急増しているベトナム人親子を対象に、公民館やこども幸齢者交流センター（旧名：児童老人福祉センター）などの公共施設の案内を行った。文化の違いからルール理解が難しい場面もあったが、丁寧に説明することで、外国籍住民の施設利用につなげることができた。

(3) 公民館まつりなどへの協力

事業に参加した外国籍住民に、公民館まつりなどへの参加を促し、ブースの出店やまつりの企画・運営に参画してもらった。それにより、地域住民との交流の場を広げることができた。

4 今後の課題

大きな課題としてあるのは、言葉の壁であり、日本語をある程度話せる外国籍住民であっても、内容を十分に理解できていない場面が多くあった。理解できなかった経験が、「難しい」という思いにつながり、関係性が薄れてしまうおそれもある。地域によりよく馴染めるよう、これまで以上に分かりやすく丁寧に説明していける体制づくりが大切である。

第5分科会

公民館等の管理・運営

「これからの時代や現状を見据えた公民館等の管理・運営の在り方」

発表テーマ	富山県南砺市の小規模多機能自治における公民館的活動について
発表者所属・役職	富山県南砺市福野北部地域づくり協議会 生涯学習リーダー 藤井 健

1 はじめに

南砺市は、富山県の南西部に位置し、北部は砺波市と小矢部市、東部は富山市、西部は石川県金沢市と白山市、南部は岐阜県飛騨市や白川村と隣接している。当福野北部地区は、水田地帯の中に美しい「散居村」の風景が広がり、独特の集落景観を形成している。江戸後期には、加賀藩により木綿織物「福野縞（ふくのじま）」の生産が本格化し、縞柄の美しい木綿は、国内だけでなく中国・東南アジアにも輸出され、福野の経済を大きく押し上げ、砺波地域の中心的存在にまで成長した歴史がある。

2 取組に至る経過

まちづくり基本条例に基づく南砺市の目指すべき住民自治として、「小規模多機能自治」の手法による「地域づくり協議会」を組織し、地域の課題を顕在化させ、ニーズに応じた事業を行い、持続可能な地域づくりを目指す。

2019年4月から小規模多機能自治の仕組みが本格スタートした。

- ① 従来の自治振興会、公民館、地区社協体制が一本化され、課題に応じた部会制が設立された。
- ② 公民館のコミュニティセンター化が進められた。
- ③ 行政依存から、市民・地域・行政の「総参加」による地域づくりへの転換を図るために、地域から職員を採用するなど、事務局を強化した。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 公民館を交流センター化し、共益的な生涯学習施設から、住民自治の拠点へ

- ① 事務局長（交流センター長）及び地域指導員を常駐化された。
- ② 組織、行事、会議内容の見直しを行われた。
- ③ 部会制による地域課題解決体制を整備された。
- ④ 市から住民自治推進交付金が交付された。（地域づくり費・地域事業推進費・生涯学習推進費・社会福祉推進費・推進人件費・施設維持管理費）

(2) 福野北部地域づくり協議会の取組について

- ① 企画・総務：生涯学習教室錬成発表会の実施。
- ② 教育・文化事業：生涯学習教室作品展、ほくぶDE夏フェス、夏休みこども支援さんさん広場、冬休みこども支援、北部地区文化祭・敬老会の実施。
- ③ 健康・福祉事業：母と子の体操教室、フレイルチェック体験会、男の料理教室の実施。
- ④ スポーツ事業：地区運動会、立山探訪、三世代交流カローリング大会の実施。

4 今後の課題

少子高齢化や若い人達の意識の多様化等により、地域活動への参加意識が薄くなり、地域の連帯感も減退している。今の時代に合わせた活動の在り方について考える必要がある。

第5分科会

公民館等の管理・運営

「これからの時代や現状を見据えた公民館等の管理・運営の在り方」

発表テーマ	生涯学習事業の運営におけるデジタル技術の活用
発表者所属・役職	愛知県岩倉市生涯学習センター 指定管理者特定非営利活動法人 来未 iwakura 課長 木下 佳美

1 はじめに

(1) 岩倉市の特色

岩倉市は濃尾平野のほぼ中央に位置し、市域の総面積は 10.49 km²と県内で最も狭小な市である。市域のほとんどが木曽川の形成した沖積平野に属し、東部には一級河川である五条川が流れるなど、豊かな自然に恵まれている。

(2) 岩倉市生涯学習センターについて

岩倉市生涯学習センターは、岩倉市の生涯学習の拠点施設として、市民の自発的な学習活動や文化・芸術活動を支援するとともに、地域のコミュニティ活動を活性化し、生涯に渡って学び続ける環境づくりに取り組んでいる。また、その活動を通して「なかま」との協働によるまちづくりを推進し、市民とともに「人間らしく豊かな感性をもって人々が集うまち」の創造をめざしている。

2 取組に至る経過

(1) これまでの取組

特定非営利活動法人 来未 iwakura は、岩倉市生涯学習センターの指定管理者として、市民にとって利用しやすい施設運営に努めるとともに、市民のニーズに沿った生涯学習事業の企画・運営に取り組んできた。

(2) デジタル技術の活用

社会環境やライフスタイルの変化に伴い、市民の情報収集や各種手続きの方法も変化してきている。こうした時代の変化に対応し、利用者の利便性向上と業務効率化を図るため、生涯学習事業の運営におけるデジタル技術の活用を進めている。

3 事業内容（テーマと研究協議の視点に沿って）

(1) 情報発信・申込みのデジタル化

- ① 分かりやすさを追求したホームページによる情報発信を行う。
- ② 生涯学習講座等のオンライン申込みを導入した。

(2) 学習機会の拡充

- ① 特別講座をオンラインライブ配信するなど学習機会を提供した。
- ② 対面での学びを基本としながら、デジタル技術を活用した新たな学習機会を創出した。

(3) 施設利用の利便性向上

- ① オンライン予約・決済できるように施設予約システムを更新し、利便性を向上させた。
- ② キャッシュレス決済の導入により、窓口での支払方法を多様化させた。

4 今後の課題

- (1) デジタル技術を活用した、さらなる利便性の向上と情報発信の充実を図ること。
- (2) デジタル化と対面による支援を両立させていくこと。